

企画名：農家と消費者の参加型調査による農薬の圃場生態系への影響比較

団体名：西日本アグロエコロジー協会

1. 報告要旨

本企画の目的は、滋賀県高島市と兵庫県丹波市において実際に稲作を行っている有機水田と慣行水田を対象として、ネオニコ系農薬が水田の昆虫相に与える影響を把握することにある。この調査をきっかけに農家と消費者がそれぞれ、アグロエコロジー的な食農システムに向けて生産・購買行動を変えることが最終的な目標である。調査は残留農薬調査と陸生および水生昆虫を中心とする生き物調査の2本柱からなり、調査結果は調査地での現地報告会や最終報告会などで発表した。また「報告書」を作成し、調査関係者などに配布したほか、facebookで公開した。

両市ともに、有機水田と慣行水田の水から代表的なネオニコ系成分であるジノテフランが検出されたが、それだけでなく土壌やイネからも多数の成分種類が検出される傾向にあった。高島市では地域限定的ながら、非ネオニコ系のクロラントラニプロールが3年間継続して検出された。本地区では本成分を含む水田用苗箱農薬の利用がないので、その流入経路を総合的・多角的に検討する必要がある。また両市とも農薬成分の検出頻度と濃度が、2022年時点よりも増加傾向にある。農薬使用量が増加しているとは思えないので、過去の蓄積や水利条件の悪化などを考慮した総合的な分析が必要である。農薬と昆虫類などとの関係については、現段階では明確な影響を認めることができなかった。ただし、クモ類、とくに造網性のクモ類についてはかなりの影響がありそうである。クモ類を除くと、昆虫相の豊かさは今のところ、農薬よりも周辺環境(里山、川辺林、湖辺林、湖沼・溜池など)、畦畔の草管理、水田中の草本類、水管理(中干含む)との関係が規定要因として重要だと推定できる。とりわけ、2024年のように水不足が7月、8月と常態化した場合には、逃げ場としての湖沼や溜池、河川(排水路を含む)が重要な役割を果たす。これらの観点から、植物生態学の観点も交えた多角的・総合的な調査が求められてくる。



2. 成果物

1. 相生市生き物調査ワークショップ「[田んぼの生き物リサーチ](#)」(2024.7.13)
2. 「[田んぼの生き物調査オンライン速報会](#)」(2024.10.30)
3. 高島市現地報告会「[高島市農業の未来を考える 田んぼの生き物調査報告会 2024](#)」(2025.1.25)
4. 丹波市現地報告会「[生きものでにぎわう田んぼとは 丹波市オーガニックビレッジの本格実施を受けて](#)」(2025.3.8)
5. 「[田んぼの生き物調査報告会](#)」(2025.3.15)
6. 「[生き物が賑わう田んぼを求めてー田んぼの生き物調査報告書 2024 年度一](#)」(2025.3.27)
7. [国際開発学会 2024 年度春季大会](#) 口頭報告 Zhang, Yujie、池上甲一、増田忠義「日本における消費者のCOM購買実態と『生き物ブランド米』に対する意識分析」(2025.6.15)